



【知財戦略エキスパート週刊連載 全5回『知財で読み解く』】日刊工業新聞の注目コラムシリーズをご紹介

2025年10月、INPIT(工業所有権情報・研修館)の知財戦略エキスパートによる注目の連載コラムシリーズ『知財で読み解く』が日刊工業新聞の紙面を飾りました。毎週木曜日に掲載されたこの全5回シリーズでは、日本企業が直面する知財戦略の最前線が、現場経験豊富なエキスパートたちによって鮮やかに解き明かされています。^[1] ^[2]

連載の概要

この週刊連載は、INPITの知財戦略エキスパートが、企業における知財活用の実践的な視点から執筆した特別企画です。各エキスパートは企業の知財部門や技術開発の現場で長年培った豊富な実務経験を持ち、現在は中小企業やスタートアップ、大学などの知財戦略支援に携わっています。^[3] ^[4] ^[5] ^[6] ^[7] ^[1]

連載ラインナップ

第1回:オープン&クローズ戦略 ~拡大市場で高収益守る~(10月2日掲載)

執筆者:戸崎善博氏^[3]

戸崎氏は、パナソニックで33年間勤務し、技術開発とライセンス業務に従事した後、京都大学の知財部門や発明推進協会を経て現職に就いたベテランです。^[3]

本稿では、東京大学の小川紘一教授が2010年代に提唱した「オープン&クローズ戦略」の実効性を、1990年代のDVC(デジタルビデオカセット)の成功事例を通じて検証しています。DVCは規格化によって市場を統一し(オープン戦略)、一方で製造設備の内製化と高度な製造ノウハウを秘匿する(クローズ戦略)ことで、日本企業が高収益と高シェアを維持できた稀有な事例です。特にパナソニックは製造世界シェア8割を達成し、デジタル製品分野で日本企業が市場を失った反省を踏まえた戦略の重要性を示しました。^[3]

第2回:経営視点の模倣品対策 ~eコマース戦略見直しを~(10月9日掲載)

執筆者:松島重夫氏^[7]

松島氏は、民間企業でR&D、知財、技術戦略の各部門に33年半勤務し、中国では上海IPG副会長なども務めた国際知財の専門家です。^[7]

この記事では、世界の模倣品の76%が中国・香港から供給されている現実を踏まえ、特にECプラットフォームにおける真正品と模倣品の混在問題に焦点を当てています。松島氏は、中小企業が限られ

た経営資源の中で効果的な模倣品対策を実施するために、事業戦略の見直し、商標権・意匠権の戦略的取得、製品の真贋鑑定の工夫など、7つの実践的なアプローチを提案しています。^[17]

第3回:生成AIめぐるリスク ~利用時のルール作りカギ~(10月16日掲載)

執筆者:幸谷泰造氏^[16]

弁護士・弁理士の資格を持つ幸谷氏は、国内電機メーカー知的財産部での実務経験と法律事務所での係争実務を経て、スタートアップの知財戦略立案やM&Aにおける知財デューデリジェンスなど、多岐にわたる業務を担当してきました。^[16]

本稿では、生成AIの急速な発展に伴う知財リスクを3つに分類して解説しています。第一に、AI生成物が既存作品に酷似する場合の著作権侵害リスク、第二に、AI生成物の著作権帰属の不明確性、第三に、営業秘密の流出リスクです。幸谷氏は、企業が生成AIを安全に活用するために、社内規程の整備、契約条項の精査、技術的フィルタリングの導入といった対策の重要性を強調しています。^[16]

第4回:創薬ベンチャーの戦略 ~競争力強化、カギは特許~(10月23日掲載)

執筆者:安藤治孝氏^[14]

安藤氏は、複数の異なる業種のメーカー、治験支援会社、大学発創薬ベンチャーで知財、法務、ライセンス、M&Aなどの業務を経験し、バイオベンチャーの協議会事務局を10年以上担当してきた実務家です。^[14]

この記事では、iPS細胞の実用化が加速する中、創薬ベンチャーのビジネスモデルと知財戦略の関係を詳解しています。製薬企業が新薬開発のほぼ全てを自社で完結させるのに対し、創薬ベンチャーは専門技術に特化し、最終的に製薬企業との提携や導出により実用化を目指します。安藤氏は、製品売上のない創薬ベンチャーにとって特許が「切り札」であり、基本特許と周辺技術を固めた知財ポートフォリオの構築が、資金調達や提携交渉の成否を左右すると指摘しています。^[14]

第5回:開示と秘匿の境界線 ~万博出展を支援して~(10月30日掲載)

執筆者:濱野廣明氏^[15]

濱野氏は、積水化学工業で28年間知財業務に携わり、出願・権利化からライセンス交渉、侵害訴訟まで幅広く経験し、知的財産部門のマネジメントを務めた後、知財戦略エキスパートとして6年間中小企業支援を行っています。^[15]

最終回となるこの記事では、2025年大阪・関西万博に出展した約30社の中小企業・スタートアップへの支援経験から、「開示と秘匿の境界線」というテーマを掘り下げています。濱野氏は、万博のような一般来場者が多い場で新技術を披露する際、競合の目をどこまで意識すべきか、そしてブラックボックス戦略をどう判断すべきかという難問に対し、分析技術の進化や競合の技術力を考慮した継続的な検討の必要性を説いています。^[15]

連載の意義と特徴

この連載シリーズの最大の特徴は、**理論ではなく実践に基づいた知見**が共有されている点です。各執筆者は企業の最前線で知財実務に携わってきたプロフェッショナルであり、現在は中小企業やスタートアップの支援を通じて、現場の課題と向き合っています。

取り上げられたテーマは、**オープン&クローズ戦略、模倣品対策、生成AI、創薬ベンチャー、技術開示と秘匿**と多岐にわたり、日本企業が今まさに直面している知財課題を網羅的にカバーしています。特に、DVCの歴史的的成功事例から最新の生成AIリスクまで、時代を超えた知財戦略の本質が浮き彫りにされています。^{[4] [5] [6] [7] [3]}

INPITの知財戦略エキスパート支援について

この連載を執筆したINPITの知財戦略エキスパートは、**相談無料、全国各地へ無料訪問可能**で、企業や大学の知財課題解決をサポートしています。2024年度の東京本部だけでも1,161件の相談支援実績があり、海外展開知財支援、営業秘密支援、スタートアップ知財支援、アカデミア知財支援の4つの専門窓口を設置しています。^[1]

また、全国各地のセミナーやシンポジウムへの**講師派遣も無料**で行っており、企業の知財戦略構築に貢献しています。^[1]

まとめ

『知財で読み解く』は、単なる情報提供にとどまらず、読者が自社の知財戦略を再考するきっかけを提供する実践的なコラムシリーズです。日刊工業新聞の紙面を通じて、知財の「落とし穴」と「活用法」を学べるこの連載は、中小企業経営者、スタートアップ起業家、知財担当者にとって必読の内容となっています。^{[5] [6] [7] [3] [4]}

INPITの知財戦略エキスパートによるこの連載が、日本企業の知財戦略の底上げと、イノベーション創出の一助となることが期待されます。^[1]



1. https://www.inpit.go.jp/katsuyo/jp_strategyexp/index.html
2. https://www.chugoku.meti.go.jp/chizai/pdf/mail_mz/R07/R071022.pdf
3. 100885456.pdf
4. 100885539.pdf
5. 100885546.pdf
6. 100885525.pdf
7. 100885516.pdf
8. <https://catincat.jp/information/words10k.html>
9. <https://www.jst.go.jp/crds/column/choryu/index.html>
10. <https://www.inpit.go.jp/topics.html>
11. <https://www.facebook.com/INPIT.jp/posts/知財戦略エキスパート-の支援活動事例を新たに追加しました102より日刊工業新聞で週刊連載中のコラム知財で読み解くや相談事例も追加しています企業の知財戦略策定に現/1645821960148045/>
12. <https://www.inpit.go.jp/index.xml>

13. https://x.com/INPIT_jp/status/1975712745745203696
14. <https://www.facebook.com/INPIT.jp/posts/知財戦略エキスパート-の活動をもっと知りたいと思った皆さまへそんな-知財戦略エキスパート-の現場の知見を直接聞けるチャンスです地域企業の持続的海外展開を実現する/1645876780142563/>
15. <https://www.inpit.go.jp/content/100884410.pdf>
16. <https://www.inpit.go.jp/katsuyo/topic/index.html>